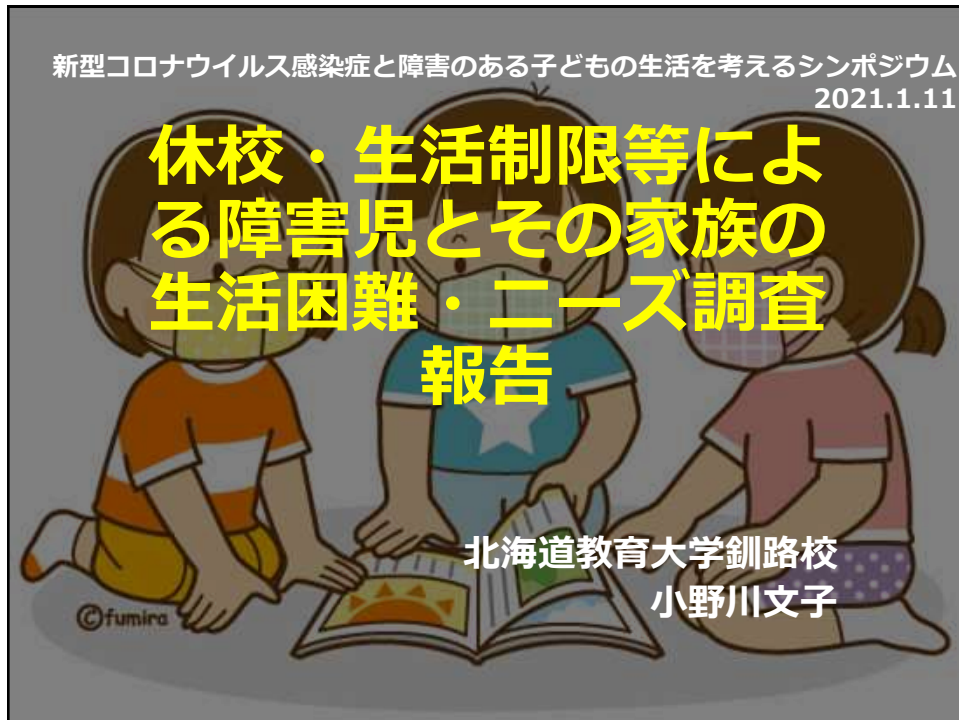




はじめに

- 新型コロナウイルスは、冬場を迎え、さらに爆発的広がりをみせ、終息も見通せない中、今もなお国民生活全体に深刻な影響を与え続けている。
- とりわけ子どもにおいては、全国一斉休校の影響は大きく、学びの機会を奪われ、長期間の自宅生活を余儀なくされ、その影響が心配される。
- 学校が再開されても、分散登校、マスク着用、三密を避ける等、学校生活全体に大きな影響を及ぼし、子どもや教職員に多くの負担を強いることとなった。

コロナ禍における子どもへの影響

「NPO法人沖縄学童・保育支援センターの調査」2020.5.12公表

【子どもが一番困っていること・心配なこと】対象：小学生～高校生

「友だちと会えないこと」63.7%、「外に出かけたり遊んだりできないこと」61.5%、「寝る時間や起きる時間が遅くなったこと」55.2%が上位を占め、5～6割の子どもは友だち関係や外出に困り、生活リズムの乱れを心配していることが報告されている。

また休校によって「勉強する気持ちになれない」55.3%を占め、勉強への意欲に影響が出ていることが明らかとなった。

同調査の保護者の心配事としては、「新型コロナウイルス感染の広がり」75.3%、「自由に外出できない」62.3%、「家事負担の増加」46.5%、「世帯の経済状況」45.9%が上位を占めている。

「新型コロナウイルスに係る就学前の子育て家庭への緊急アンケート調査」
(特定非営利活動法人全国認定こども園協会) 2020.6.5公表

0歳～6歳の子どもの保護者4人に3人が「子育てや生活で困った」と回答
子どもの気になる変化としては「メディアの利用が増えた」64.8%、「生活が不規則になった」43.5%、「体力が低下した」38.2%、「きょうだい喧嘩が増えた」33.6%など。また、「イライラして怒りっぽくなった」63.3%、「子どもを叱ることが増えた」51.4%等、保護者の半数以上が自身の心身に変化を実感

障害・病気のある子どもへの影響

大津市障害者自立支援協議会「学齢期放課後支援アンケート報告書」：
2020.6.1～6.14実施

保護者が困ったこととして「食事を3食つくるのが大変」58.1%、「いつもの生活パターンが崩れて疲れた」57.4%、「親だけが感染した時、障害のある子どもをどこで誰がみてるのかわからなかった」50.7%で、半数以上の保護者は家事負担や子どもの養育に関して不安が大きい。

また、子どもの様子では「生活リズムが乱れた」55.6%と突出して多く、「子どもがイライラしていた」28.5%、「子どもの運動不足で太った」25.9%「きょうだいげんかが多くなった」22.2%と続き、生活の乱れや身体面や精神面での影響が出ていることが報告されている。

京都障害児放課後活動パッチワーク・京都教育大学発達障害学科丸山啓史研究室「障害のある子どもと家族の「コロナ休校」の元での生活に関するアンケート報告書」：2020.9公表

【休校中に困ったこと】

「テレビ・動画・ゲーム等の時間が多かった」65.3%、「子どもの生活リズムが乱れた」51.6%、「子どもをみる保護者の負担が大きかった」38.6%、「保護者がイライラすることが多かった」37.2%、「子どもがイライラすることが多かった」27.1%、「感染のことをおもうと祖父母に預けられなかった」26.7%等、子どもの生活リズムや子ども・保護者の双方に心身への影響が現れている。また、子どもの預け先の問題も挙げられている。

障害・病気のある子どもへの影響

医療的ケア児などががんばる子どもと家族を支える会（Wings）「新型コロナウイルス感染拡大に伴う医療的ケア児・難病児・重症心身障害児等のハイリスク児・者の不安・困りごとアンケート」：2020年4月23日公表

回答概要：新型コロナウイルス発生前と比較して、不安が高まっている家族は97.6%

順位	回答内容	回答割合
1	保護者感染時の子どもの 預け先の確保	86.4%
2	子どもが感染した場合の入院付き添いや治療に関する 情報不足	82.6%
3	医療材料・衛生用品等の 不足	75.6%
4	医療崩壊 （治療継続困難等）	73.2%
5	病院・通所・訪問サービス等の利用時の感染（往診医の不足等含む）	69.0%
6	買い物・通勤等の外出時の感染（家庭内感染）	66.2%
7	行政における医ケア児等の ハイリスク児家庭の把握漏れ	53.0%
8	新型コロナと無関係に入院した子どもへの面会禁止	42.2%
9	通所・訪問・入所サービス等の利用制限	38.7%
10	収入減・経済的負担の増加（ひとり親家庭の生活困窮者等含む）	30.7%

調査目的

学齢期の障害児とその家族がコロナ禍の中、休校や様々な活動制限によって**どのような生活困難・ニーズがあるのか**、そのことが**障害児の発達にどのような影響を及ぼしているのか**を明らかにすることが緊喫の課題である。休校中及び学校再開後の子どもやその家族の生活実態を調査し、短期的・短期的対応ではなく**長期的視点に立った対応を検討していく**必要がある。

本調査では、障害児やその家族を対象に生活実態調査を実施し、**全国一斉休校、外出自粛に加え、学校再開後の生活制限等が障害児の生活と発達にどのような影響を及ぼしているか**を明らかにし、今後の課題を考察する。

調査内容・方法

調査対象：東京都及び埼玉県の一部、北海道特別支援学校73校の保護者（約6,000名）

調査内容：コロナ禍による休校時及び学校再開以降の障害児とその家族の生活困難・ニーズ

具体的には、①子どもの生活面・発達面で心配なこと、②家族の生活の困難の2点について、休校時と学校再開後の調査を行い、**障害児の生活と発達に及ぼす影響**について考察する。

調査方法：Googleフォームによるアンケート調査。北海道特別支援学校の管理職あてに調査依頼を行い、承諾いただいた学校より保護者あてに、アンケートのQRコードを配布する。QRコードからアンケートに回答していただくことをもって保護者の承諾を得たものとする。調査にあたってはあくまでも保護者の任意であり、データは全てWebサイト上で管理され、個人を特定されることはない。調査結果の閲覧は、研究者に限定し、調査終了後はデータを削除し、ネット接続を遮断する。

調査期間：2020年9月～10月

調査結果

回答者数 562人（有効回答数549人）

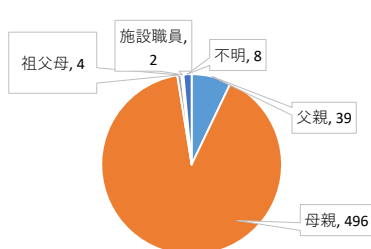


図1 回答者について n=549

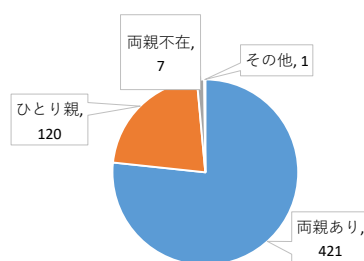


図2 家族構成 n=549

【回答者の居住地域】「北海道」468人（85.2%）「東京都」31人（5.6%）
「埼玉県」44人（8.0%）「その他・不明」6人（1.1%）

【家族構成】「両親あり」421人（76.7%）「ひとり親」120人（21.9%）
「両親不在」7人（1.3%）祖父母と同居は63人（11.5%）

子どもについて

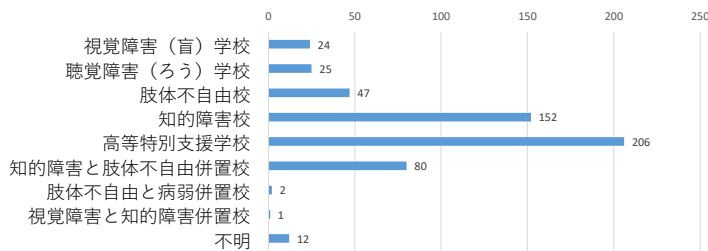


図3 子どもが在籍する学校種 n=549

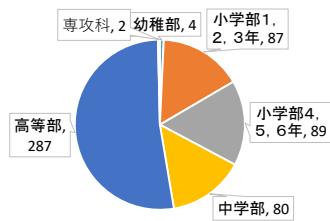


図4 子どもが在籍する学部・学年 n=549

高等特別支援学校が一番多く206人（37.5%）、全体としては知的障害校に在籍している子どもが圧倒的に多かった。
子どもの学年は、**半数以上が高等部生**であった。

子どもについて

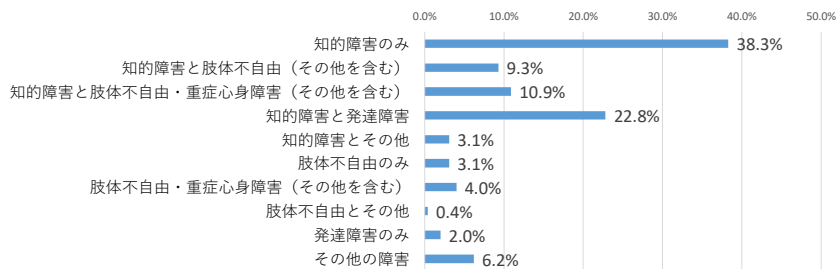


図5 子どもの障害種別 n=549

【障害程度】障害者手帳で判断できる515人でみると、「**重度**」（「療育手帳A判定」「身体障害者手帳1級」「重症心身障害」のいずれかに該当）と思われる子どもは**298人（57.9%）**、「**中軽度**」（「療育手帳B判定」「身体障害者手帳2級以下」に該当）と思われる子どもは**217人（42.1%）**。**約6割は重度児である。**

その他は、障害程度としては判断できない「視覚障害のみ」15人、「聴覚障害のみ」19人。

複数の障害を併せ持つ子どもは、**283人（51.5%）**と半数以上を占め、そのうち3つ以上重複している子どもは66人（12.0%）。また、重症心身障害の子どもで「**医療的ケアあり**」と回答した人は**38人（6.9%）**である。

通学方法と福祉サービスの利用状況

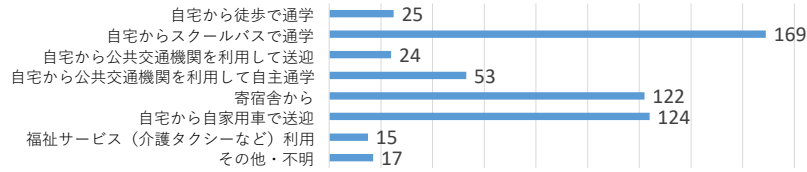


図6 通学方法 n=549

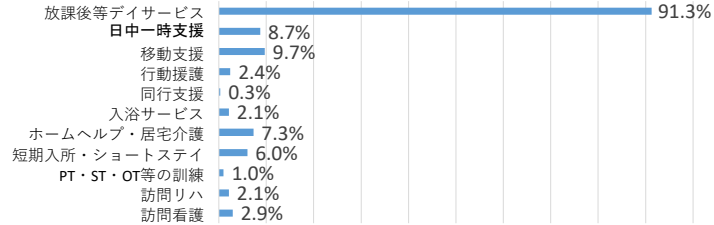


図7 日常的に利用する福祉サービスの内容(複数回答)

n=381

保護者の送迎による通学が148人（27.0%）と3割近く、まだまだ保護者の負担は大きい。自由意見では「公共交通機関の利用は感染リスクが高い」「スクールバスも3密が避けられない」として、**コロナ禍では保護者の送迎に切り替えた方もおり、さらに負担大**。7割の人が日常的に何らかの福祉サービスを利用し、そのうち9割以上が「放課後等デイサービス」を利用。しかし、3割は、日常的に福祉サービスを利用していない。

休校時の子どもの居場所や一緒に過ごした人

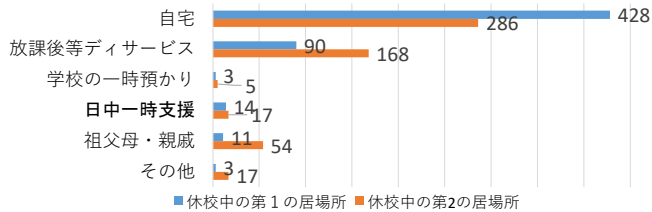


図8 休校中(8時～18時)の居場所

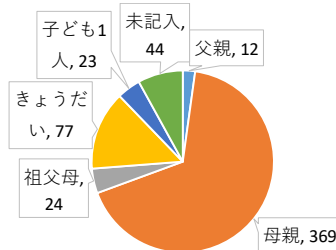


図9 休校中一緒に過ごした人

一番多くの時間を「自宅」で過ごした人は428人（78.0%）と8割近くを占め、「放課後等デイサービス」は90人（16.4%）と2割も満たない。

どちらかを「自宅」とした人は523人（95.3%）。「自宅以外」は「祖父母や親せきの家」や「母親の職場」であり、障害児を預けられる支援先の少なさがうかがえる。

いっしょに過ごした人で一番多かったのが「母親」369人（67.2%）で、2割近くは子どもだけで過ごしていた。

休校中の子どもたちの生活についての悩み、困りごとの上位10項目（複数回答）

悩み、困りごとの内容	人数	%
運動不足等、身体を動かすことが減った	450人	82.0%
テレビやネットに使う時間が増えた	377人	68.7%
友達や家族以外の人と接する機会が減り、自宅から出たがなくなった	311人	56.6%
メリハリある生活ができなかった	262人	47.7%
運動不足などにより体力の低下や身体面での影響が心配	257人	46.8%
就寝時間や起床時間の遅れや昼寝等の睡眠リズムが乱れた	244人	44.4%
行動制限や自由にできない等でイライラやパニックなどが増えた	153人	27.9%
食生活が不規則となった	137人	25.0%
食欲や栄養バランスが悪くなった	120人	21.9%
自宅での勉強では学習の遅れや理解度に不安がある	120人	21.9%

運動不足やテレビやネットへの依存傾向、睡眠時間や食生活の乱れが多い。また、運動不足による体力の低下や行動制限によるイライラやパニックといった心身面での影響が上位を占めた。さらに、人と接する機会が減り、「自ら出たがらない」といった子どもも多かった。

子どもの生活：生活リズムの影響

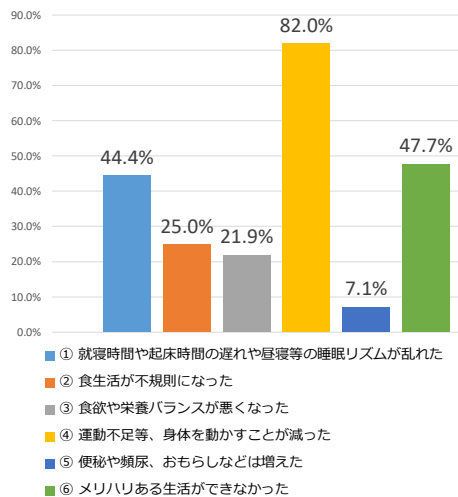


図10-1 学校休校中で、子どもの様子が気になったこと、困ったことはありませんか
＜生活リズムについての影響＞

8割以上の保護者が「運動不足等、身体を動かすことが減った」と回答。

通常時においても、外出困難や様々な体験をする機会が少ない障害児においてはとても深刻な状況である。また、半数近い保護者が生活リズムに関する心配をしていた。※丸山らの調査とほぼ一致

【自由意見】では、運動不足等から「体重増」あるいは「体重減」「食欲減退」「筋力の低下」等を心配する声が多かった。また、「夜の睡眠サイクルがずれて、未だに治りません」「ゲームやスマホゲームが手放せなくなってしまった」など、休校中で乱れた生活が、学校再開後も続いていることうかがえる。

子どもの生活：健康面の影響

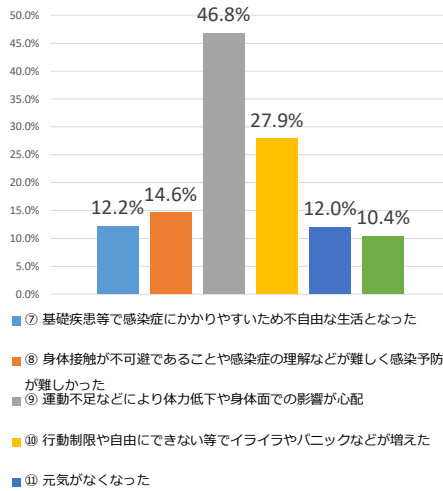


図10-2 学校休校中で、子どもの様子で気になったこと、困ったことはありましたか
〈健康面についての影響〉

「運動不足などにより体力低下や身体面での影響が心配」46.8%と半数近い保護者が心配していた。また、「行動制限や自由にできない等でイライラやパニックなどが増えた」といった心理的影響も3割近い保護者が感じていた。
※丸山らの調査と一致

【自由意見】では身心の健康や発達に関する意見が最も多く、イライラや情緒不安定、「チック」といったメンタル面での影響が多く述べられていた。特に気になる点としては、「パニック」「自傷行為」「暴力的行動」「便いじりなどの自己刺激が増えた」などの「問題行動」が現れたり、「コミュニケーション力の低下」「身辺自立面での後退」等、発達面での影響も多く、さらには「てんかん」「音や光の過敏の進行」など病気や障害の進行もみられ、深刻な状況がうかがわれる。

子どもの生活：学習面の影響

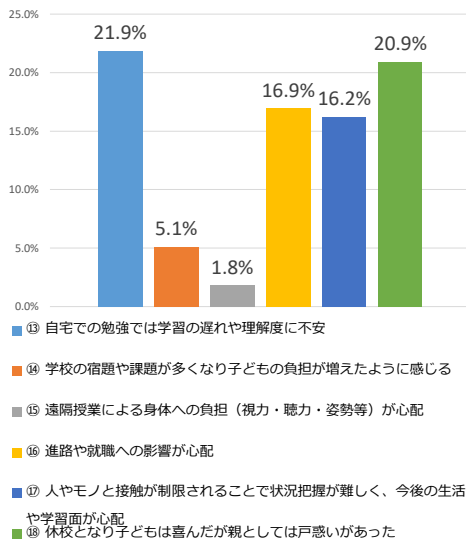


図10-3 学校休校中で、子どもの様子で気になったこと、困ったことはありましたか
〈学習面についての影響〉

2割の保護者が自宅学習での不安を感じていた。学校の課題や遠隔授業等の心配は少なかったが、そもそも特別支援学校で課題や遠隔授業の実施が少なかったことが予測される。

【自由意見】では、「自宅学習は全盲ろうなのでプリントやネットを使うものは元々できず、先生との対面授業が受けられないと学習が出来ないです」といった切実な声や実習ができず就職をあきらめたというケースもあった。

障害特性による困難もあることから、今後、障害種別毎の困難を詳細に分析する必要がある。

子どもの生活：人との関り・社会性の影響

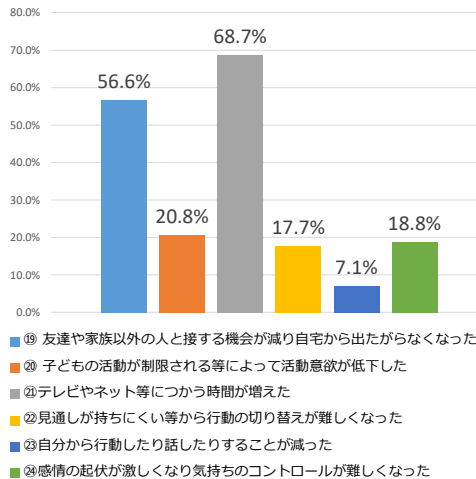


図10-4 学校休校中で、子どもの様子で気がなったこと、困ったことはありましたか
＜人との関り、社会性についての影響＞

「テレビやネット等につかう時間が増えた」68.7%、「友達や家族以外の人と接する機会が減り自宅から出たがらなくなった」56.6%が特に多かった。平時においても外出困難、家族以外の人との関りが少ない障害児においては、さらにその困難が大きくなっている。

また、2割近い保護者は子どもの活動意欲の低下、気持ちや行動のコントロールが難しくなったと感じていた。

【自由意見】では、「スマホが手放せなくなった」「ゲームがやめられない」「会話の内容がテレビやYouTubeのことばかり」などが記述され、テレビやネットへの依存が心配される。※丸山らの調査と一致
また「異性関係」の心配もあり。

子どもの生活：その他の自由意見

【学校再開後の心配】

- ・ 入学してすぐに休校になったため、開校してから学校生活、クラスメイトとの関わり方などに慣れるのに時間がかかった。
- ・ 休校明けから不登校になった。
- ・ 本人の予定になかった休校で、自宅にいた時間が長かった為、学校や寄宿舎、デイサービスへ行く、という概念がリセットされてしまった。登校が始まり、また1からのスタートで、理解できない本人へのストレスははかりしれない。

【感染予防の大変さ】

- ・ マスクを正しく装着することが難しい(感覚過敏、こだわり)。
- ・ 本人がマスクをつけることが難しい上に、最初は人がしているのも取ろうとしたり、貴重なマスクを破かれたりして困った。
- ・ 感染症に関して理解が難しく、完全に予防する事が出来ません。

【その他】

- ・ 学校で生活する方が本人にとって身体にも心にも良いということを改めて知りました。

休校中の家族の悩み、困りごとの上位10項目（複数回答）

家族の悩み、困りごとの内容	人数	%
子どもや自分が感染しても隔離生活などできない	328人	59.7%
家族以外の人と関わる機会が減った	300人	54.6%
在宅時間が長くなり、食費等の生活費やその他の支出が増えた	295人	53.7%
気分転換がなかなかできなかった	281人	51.2%
マスクなど衛生用品が手に入らず困った	248人	45.2%
子どもを家で1人にできないためいろいろ不便が生じた	238人	43.4%
自分が倒れられないなど精神的に張り詰めた状態が続いた	235人	42.8%
家事負担や介護負担が増えた	233人	42.4%
自分が子どもに感染させるのではないかが心配だった	228人	41.5%
この先のことがわからず不安だった	216人	39.3%

ほとんどの保護者は子どもの介護を含め養育全てを担っていることから、「隔離生活などできない」「自分が倒れられない」といった精神的に張り詰めた状態であったことが分かった。また、家族以外の人と関わる機会が減るなど「孤立」しやすい状況もあったと思われる。

家族の生活：就労や経済的影響

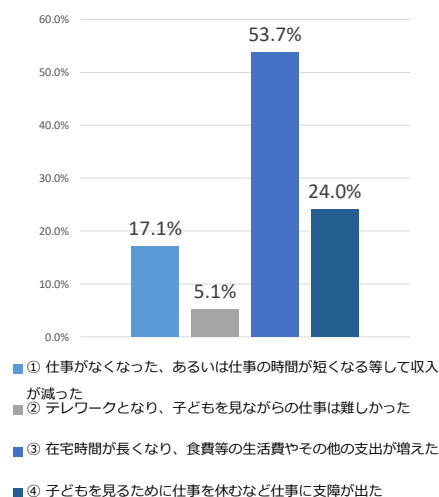


図11-1 学校休校中、保護者や家族の方が困ったことはありませんか。
〈就労や経済的影響〉

「在宅時間が長くなり、食費等の生活費やその他の支出が増えた」の項目で53.7%と半数以上を占めた。その他、「子どもを見るために仕事を休む等仕事に支障が出た」24.0%、「仕事が無くなった、あるいは仕事の時間が短くなる等して収入が減った」17.1%と子どもの養育困難が就労に影響を与えたり、経済的影響も少なくないことが分かった。

【自由意見】では、障害児を家で見ながらのテレワークの困難だけでなく、「中学部だからとテレワークが認められなかった」など、感染予防として呼びかけられていたテレワークすら障害児の場合は困難であることも分かった。子どもを預けることが出来なくて「失業」といったものや、「1人での留守番」「仕事の合間にトイレ介助」を余儀なくされた保護者もいた。

家族の生活：保護者の生活への影響

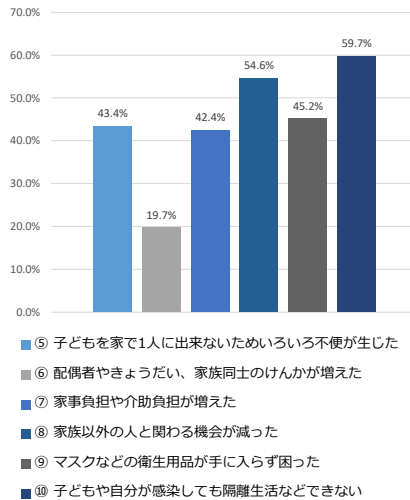


図11-2 学校休校中、保護者や家族の方が困ったことはありましたか。
＜保護者の生活(外出、自分の時間)についての影響＞

一番多かったのは「子どもや自分が感染しても隔離生活などできない」**59.6%**、次いで「家族以外の人と関わる機会が減った」**54.6%**、「マスクなど衛生用品が手に入らず困った」**45.2%**、「子どもを家で1人にできないためいろいろ不便が生じた」**43.4%**とほとんどの項目が5割前後と高かった。**年齢が高くなっても介助等で離れられない障害児の独自の困難**がうかがえる。

【**自由意見**】では、「マスクを嫌がり自傷行為がはじまるので、できず、外出や通院で困った」「**家族崩壊の危機**にさらされた」「母親から離れず、親が何も出来ない日が何度かありました」等、切実な訴えが多く挙げられた。

家族の生活：保護者の健康への影響

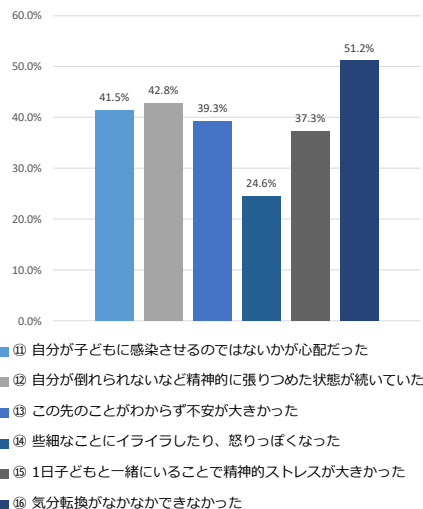


図11-3 学校休校中、保護者や家族の方が困ったことはありましたか。
＜保護者の健康面についての影響＞

一番多かったのは「気分転換がなかなかできなかった」**51.2%**と半数を超えた。次いで「自分が倒れられないなど精神的に張り詰めた状態が続いた」**42.8%**、「自分が子どもに感染させるのではないかが心配だった」**41.5%**と続き、**4割以上の保護者が精神的緊張を強め、不安感が大きかった**ことが示された。多くの障害児の場合は**年齢が高くなっても介助が必要であり、常に目が離せないケースも少なくない**。しかも、子どもの年齢が高くなればなるほど親は高齢化し介助負担が大きくなる。ましてコロナ禍において子どもが不安定になったり、「問題行動」が現れる等、その負担は大きい。

【**自由意見**】では、「付きっきりの為精神的にも体力的にも大変だった」「不眠に悩んでいるので精神科から眠剤と精神安定剤をもらって、服用し何とか今をしのいでいる」等、限界に近い状態。

家族の生活：親子関係への影響

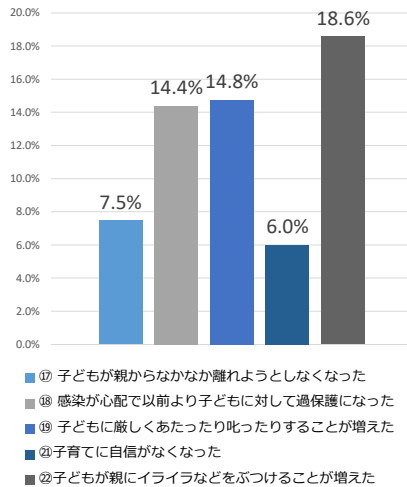


図11-4 学校休校中、保護者や家族の方が困ったことはありましたか。
＜親子関係についての影響＞

親子関係についての影響は相対的に少なかったが、その中で一番多かったのは「子どもが親にイライラなどをぶつけることが増えた」18.6%であった。また、7人に1人の保護者は、「厳しく当たったり叱ったりすることが増えた」「以前より子どもに対して子どもに対して過保護になった」と回答した。保護者の精神的不安やストレスが子どもにも少なからず影響を与えていると思われる。

【自由意見】では、「母親から離れず、親が何も出来ない日が何度ありました」「親子2人の生活のため、自粛期間から2人きりで居るので…人との関わりがない事が不安で気持ちを保つ事が切ないです」等、自粛生活はさらに孤立した子育てを作り出していると推察される。

福祉サービスの利用で困ったこと

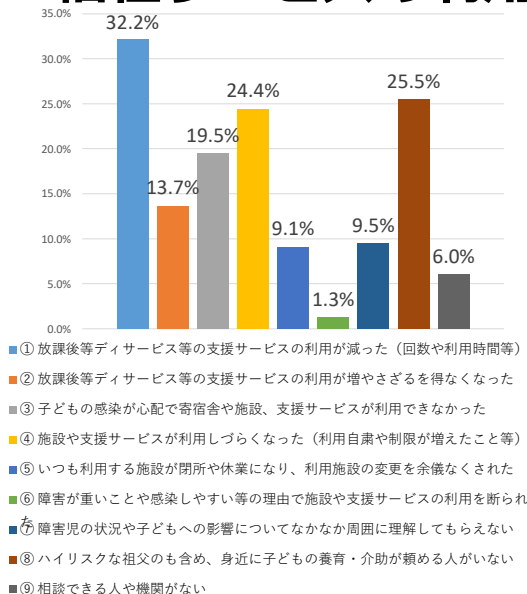


図12 学校休校中、放課後等デイサービスなどの利用について困ったことはありましたか。

3割以上の保護者が「放課後等デイサービスの支援サービスの利用が減った（回数や利用時間）」と回答。また、4人に1人が「施設や支援サービスが利用しづらくなった」「ハイリスクな祖父母も含め、身近に子どもの養育・介助を頼める人がいない」と回答。

【自由意見】では、いつも利用している福祉サービスが休止や利用制限によって保護者の就労や健康に大きな負担を強いていたことがうかがえる。さらに、「高学年の子どもが利用できるサービスがない」「地域外の学校に通っている子どもが居住地域での施設の利用を断られる」「祖父母がいるため、利用を断られ、祖父母が体調を崩してしまった」等、ケースも少なくない。必要としている福祉サービスが利用できない状況が示された一方で、施設等への感謝も多く寄せられており、放課後等デイサービスは子どもや保護者にとって大きな支えとなっている。しかし、脆弱な体制の施設に大きなしわ寄せがいつていることも事実。

学校再開後の学校生活について

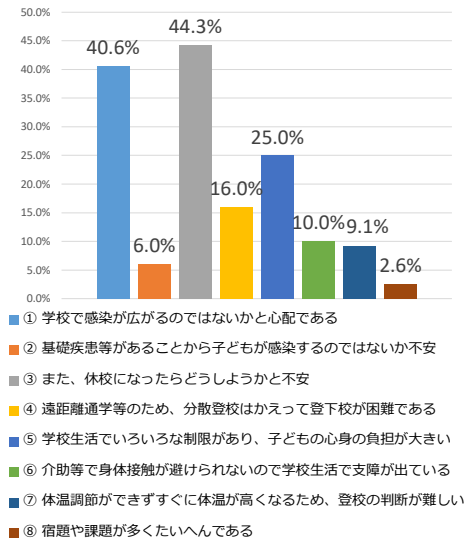


図13-1 学校が再開され、今、お子さんのことで心配していることや困っていることはありますか
＜学校生活について＞

4割以上の保護者が「また、休校になったらどうしようかと不安」「学校で感染が広がるのではないかと心配である」と回答し、**学校が再開しても不安が続いている**。また、4人に1人が「学校生活でいろいろな制限があり、子どもの心身の負担が大きい」と感じていた）。

学校生活の**継続を望みつつ**、学校での感染予防やそのことによる活動の制限などに**不安を抱えている様子**がうかがわれる。

【**自由意見**】では、「円形脱毛症ができた」「深い呼吸を、することが多くなった」「学校生活にやや馴染めず、睡眠の乱れがある」「学校にいくのが嫌だ、家がいいと言うようになった」等、**学校再開後も制限のある生活で心身の不調や学校生活に支障が出ている**。

学校再開後の学校生活について

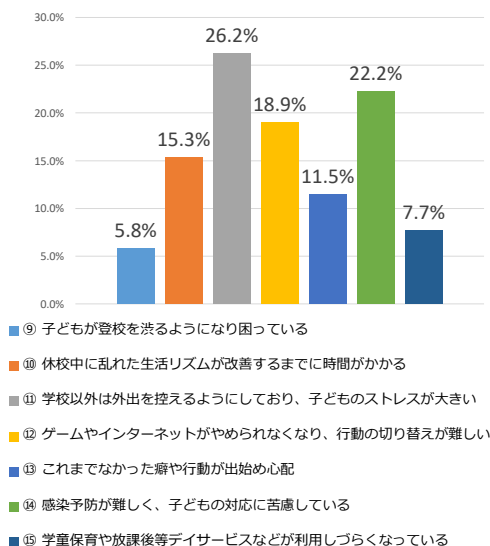


図13-2 学校が再開され、今、お子さんのことで心配していることや困っていることはありますか
＜生活全体について＞

一番多かったのは「学校以外では外出を控えるようにしており、子どものストレスが大きい」26.2%、次いで「感染予防が難しく、子どもの対応に苦慮している」22.2%、「ゲームやインターネットがやめられなくなり、行動の切り替えが難しい」18.9%。

また「休校中に乱れた生活リズムが改善するまでに時間がかかる」15.3%と、**学校再開後もゲームやインターネットの時間や生活リズムに苦慮している保護者が一定数存在した**。

【**自由意見**】では、「見通しが持てない状況なのと、行動に制限がかかっていることが本人のストレスになっている」「しばらくは生活リズムが乱れたままで、睡眠時間が少なくなり、日中に情緒不安定」「学校に行きたがらないことが増えている」等、**学校再開後も子どもの体調面や生活面での影響が続いている**。

今後の支援：学校に対して

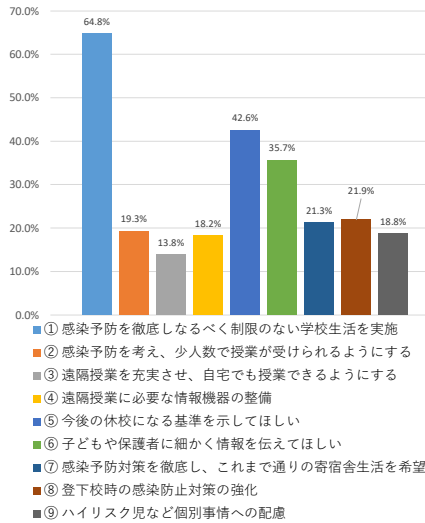


図14-1 今後の支援についての要望
＜学校に対して＞

「感染予防を徹底してなるべく制限のない学校生活」**64.8%**が突出して多かった。また、「今後の休校になる基準を示してほしい」「子どもや保護者に細かく情報を伝えてほしい」等、**突然の休校措置やその後の対応に関する情報の遅れや基準の明確化を求めている。**

【**自由意見**】では、体温調節が難しいケースの対応やスクールバスでの感染予防、集団生活である寄宿舎での対応等、**特別支援学校独自の課題**があげられた。

また、公共交通機関における感染対策を求める声や**居住地域に通える学校や子どもを預けられる施設の要望**、あるいは自営業など職住分離が難しい状況で、子どもと一日過ごさなければならぬ状況への理解を訴える声もあった。

母子世帯等、子どもを家に置いていけない家庭からは、買い物支援等、**日常生活にかかわる支援**を求める声もあった。

今後の支援：国・行政に対して

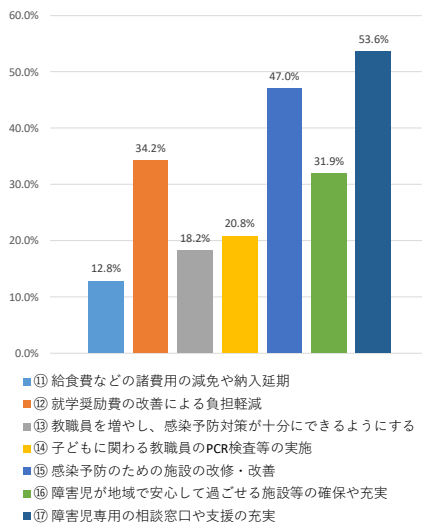


図14-2 今後の支援についての要望
＜国・行政に対して＞

一番多かったのは、「障害児専用の相談窓口や支援の充実」**53.6%**、次いで「感染予防のための施設の改修・改善」**47.0%**、「就学奨励費の改善による負担軽減」**34.2%**、「障害児が安心して過ごせる施設等の確保や充実」**31.9%**と続く。

半数以上の保護者が、**コロナ禍における相談・支援体制の充実**を望んでいた。

【**自由意見**】では、「父母が感染した場合に子供の世話をどうしたらよいのか」とにかく心配」「親子や家族で安心して入院、治療ができる体制を整えてほしい」等、家族が感染した時の子どもの**預け場所に関しての要望**が多かった。また、障害児やその家族への理解についての意見も多く、障害児に対する教育・福祉の課題がコロナ禍でさらに浮き彫りとなったといえる。

子どもの健康・発達への影響が深刻

- これまでの調査から、「外出困難」「運動不足」「生活リズムの乱れ」「ゲームやネットへの依存」等は、当初から想定され、それが**障害児の発達等にどのような影響をお呼びしているのかに注目**した。
- 今回の調査では、運動不足等から「体重増」あるいは「体重減」「食欲減退」「筋力の低下」が見られ、3割近い保護者が「行動制限や自由にできない等でイライラやパニックなどが増えた」と回答した。
- また、「自傷行為」「暴力的行動」「使いじりなどの自己刺激が増えた」等の「問題行動」が現れたり、「コミュニケーション力の低下」「身辺自立面での後退」等、**発達面での影響も多く**、さらには「てんかん」「音や光の過敏の進行」など**病気や障害の進行もみられ、深刻な状況**がうかがわれた。
- 障がいや病気といった**ハイリスクの子どもにとっては、発達のみならず生命をも脅かしていることから、「子ども全体」で括るのではなく、独自の支援体制**が必要。
- 年齢が高くなればなるほど介助面で大変になること、障害程度や障害種別、医療的ケアの有無で**必要な支援内容が変わってくる**こと等を理解する。

個人努力を求める感染対策では困難が増幅するだけ

- 「マスク着用」「三密を避ける」「社会的距離」といった「**個人努力**」を求める感染対策だけでは、障害児やその家族をさらに追い込み、**保護者の身体的・精神的負担を増大させる**。
- 「個人努力」が難しい障害児やその家族に対して、**周囲の冷たい視線や差別的言動**も少なくない。
- 「テレワーク」も障害児家族においては困難を増幅させ、ますます就労困難へつながることもある。

※厚生労働省（2020）「国民生活基礎調査令和元年」より

6歳～18歳未満の子を持つ母親の就労率：**75.0%**

※小野川らの特別支援学校の調査（肢体不自由児は東京都、知的障害児は北海道）

肢体不自由児（6歳～18歳）の母親の就労率：**58.5%**

知的障害児（6歳～18歳）の母親の就労率：**65.7%**

就労している母親でみると肢体不自由で7割、知的障害で8割近くが非正規職員ないしパート。障害児の母親は、就労率が低い上に、多くが非正規・パート

コロナ過ではまさに障害児を育てる母親を直撃。

- **社会的孤立を進行**させ、保護者の精神的不安やストレスが少なからず**子どもに影響を与えている**。
- **コロナ禍の障害児家族の実態を職場や地域、社会全体が理解する**

社会的支援の乏しさが露わに

- ・ 7割の家庭が「福祉サービス」を利用し、そのうち9割が「放課後等ディサービス」を利用、**障害児やその保護者の生活を支えている**。
- ・ コロナ禍より一斉休校は、より「密」で職員体制の厳しい福祉現場が支えることとなったが、**やむを得ない利用自粛**も少なくなかつ

「基礎疾患があり感染が心配で一切預けられなかった」「重度の呼吸器疾患であり、いまだに、医療、福祉等のサービスを受けるのを躊躇している」等

- ・ 施設側は「利用制限」や「時間短縮・調整」で感染予防を行い、利用者は「自粛」。結果として利用者が減り、**経営難**に。**制度の問題**
- ・ **リスクの高い祖父母に預けるか、仕事を辞めるかの選択**

「15歳以上の子どもが利用出来る場所が無い」「ショートステイの受け入れ先が、無い」「居宅支援のお風呂介助が利用出来ず結構しんどかった」「町外の支援学校の子どもは利用できない」「放課後ディサービスでの感染が心配で利用を少なくしたところ、事業者からかなり熱心に元のように通うよう求められて困った」等

自分が感染しても「隔離生活ができない」「誰が子どもを見てくれるのか」等、**これまで家族で支えてきた体制の限界**。**社会的支援の充実**

障害・病気のある子どもにとって学校とは何か？

- ・ 生命を守り、育てる場
 - ・ 発達の土台である生活を支える場
- 教育的機能**と**福祉的機能**双方の役割がある

内田良（2020）

「今回の臨時休校は、根幹にあると思われていた機能のさらにその土台にある重大な機能を浮かび上がらせた。それは学校の「居場所」機能」
共同通信の調査を紹介し「県庁所在地や政令市政令市など84自治体のうち**77%**にあたる**65自治体**が**休校中の児童の受け入れ**を行なった」
「学校とはまず、教職員の庇護のもと、子どもがその場で生きていくこと、生活していくことを保障されている場なのである。」

※『ポスト・コロナショックの学校で教師が考えておきたいこと』
東洋館出版社より



コロナ過で「特別支援学校」はどうなっていたか？

今回の調査では、**学校の一時預かりを利用した保護者は3人（0.5%）**
広域である北海道の課題、感染リスクが高く、対応が難しい等、独自の課題はあるが…？「どうすればいいのか」といった声が多く聞かれた。

障害・病気のある子どもにとって 「学校」とは何か？

- ・「学校」とりわけ特別支援学校は、障害のある子どもに保障された唯一の**公的教育機関**

→**長期的**には、学校の教育条件（人的・物的）の改善・充実を進めていく。

→**緊急事態時の対応**（スクールバスの増車、教職員等の社会的検査等）

→**学校やその地域が主体・主導**となって進める。

- ・ 保護者の就労も含め、家族の生活を支える場

→たとえ「休校措置」となったとしても、支援が必要な子どもや保護者に対して「**学校ができること**」を考える。

→社会全体が障害児やその家族の状況を理解し、安心して仕事を休める職場環境、独自の相談・支援体制の確立、福祉サービスの充実 等

おわりに

- ・ コロナ禍による障害・病気のある子どもの状況は、全ての子どもにおいての警鐘でもある。
- ・ 環境の変化に弱い障害のある子どもにとっては、今回の急激な変化は、身体や心にダイレクトに影響を及ぼし、様々な形で表れている…。

副島賢和（2020）は、子どもの心理面への影響として東日本大震災のときと近いものがあるとして、「震災のすぐあとは、大人も大変でした。そのようなときは、子どもたちは、大人に迷惑がかからないように、**がんばったり、我慢したりして過ごしている姿**が見られます。ある程度期間がたったら、大人が落ち着いてくると『待ってました』とばかりに、**子どもたちの表現が始まります**」

※『ポスト・コロナショックの学校で教師が考えておきたいこと』
東洋館出版社より



障害児とその家族特有の問題ではなく、子ども全体の
問題として対処すべき課題である。